北海道方言における “V-(r)asar-” 構文の意味に関する記述的研究

—認知文法からのアプローチ—

関根雅晴
京都大学大学院
yaqing621@gmail.com

概要：本稿では、北海道方言における V-(r)asar- 構文について、認知文法の理論的枠組みを援用し分析を行った。当該構文に対する従来の研究は、用法の分類が安定せず、それらの共通性を捉えた分析も十分に行われているとはいい難い。そこで本稿では、他動詞派生の V-(r)asar- 構文を「因果的事態における結果事象をプロファイルする」ものとして特徴づけた氏家 (2016) を検討したうえで、自動詞派生の V-(r)asar- 構文を、外的な要因が作用することにより生じた事態における、対象の変化と結果状態をプロファイルする構文であると特徴づけた。さらに、上述の特徴づけを踏まえ、早津 (2016) による動詞の分類を導入し、当該構文において用いられ得る動詞について、その意味的特徴および生産性について検討を行った。その結果、語幹動詞の概念構造がスキーマ的特徴づけに逸脱しない範囲であれば、様々なタイプの動詞が生産的に V-(r)asar- 構文として実現しうることが明らかとなった。自動詞から派生された形式も含め包括的に分析することにより、従来は他動詞派生の用法が取り上げられることの多かった当該構文の研究に新たな知見を提供することを目指す。

キーワード：北海道方言、V-(r)asar- 構文、認知文法、行為連鎖

1. はじめに

北海道方言[1] には、「このペンはよく書かさる」（このペンはよく書くことができる）のように表現される、“V-(r)asar 構文”（以下、ラサル構文と表記する）が存在する[2]。当該構文は、動詞

---

[1] 北海道方言は大きく海岸部方言と内陸部方言の二つに分けられる（cf. 石垣 1982）。本研究においてテーマとして取り上げるラサル構文は、海岸部方言および内陸部方言の双方において共通する構文、すなわち「地方共通語」であるため、本稿では上位の分類である「北海道方言」として扱うこととする。

[2] 本稿における例文は、断りがない限り筆者の作例による。なお、筆者は、北海道出身（芦別市、札幌市）の両親のもと、言語形成期を含む 20 年間を北海道（砂川市、士別市、岩見沢

© 2019 Masaharu Sekine. All Rights Reserved.

語幹に形態素　/-(r)asar-/　を後接させることにより表される。この形態素は、北海道方言に特徴的な助動詞であり、「自発のサル・ラサル」(石垣 1991) とも呼ばれる。そして、研究者により若干の用語法、分類上の差異が認められるものの、当該構文はおおむね「自発」「可能」「結果状態」の用法をもつとされている。ラサル構文は、行為の対象を主語にとり、動作主は斜格であっても文中に現れることが出来ないという、現代日本共通語（以下、「共通語」で統一）では観察されない現象を含む点で、特徴的な構文であるといえる。

本稿では、認知文法 (cf. Langacker 1987, 1990, 1991, 2008) の理論的枠組みを援用し、当該構文の分析を行う。従来はあまり行われてこなかった自動詞から派生された形式も含め包括的に分析することにより、他動詞派生の用法が取り上げられることの多かったラサル構文の研究に新たな知見を提案することを目指すものである。まず、第 2 節では、当該構文の主要先行研究にもとづき、ラサル構文について概観する。つづく第 3 節では、認知文法の理論的枠組みを援用し、当該構文の基本的特徴づけを行う。さらに、早津 (2016) の動詞分類を導入し、当該構文に用いられる動詞のタイプについて検討を行う。第 4 節はまとめと展望である。

2. 先行研究

本節では、ラサル構文に関する先行研究にもとづき、当該構文の統語的、意味的特徴について概観する。具体的には、ラサル構文の先駆的な記述研究である山崎 (1994) 、他動詞を語幹として持ち結果状態を表す「逆使役」(cf. Haspelmath 1993) としての用法を扱った佐々木 (2007, 2014) 、類型論的な見地から、共通語の「ラレル」、韓国語の cita とラサル構文を比較し分析を行った円山 (2006) を主に参照する[3]。

2.1 統語的特徴

ラサル構文は、他動詞または自動詞の語幹に付加されることによって実現される(山崎 1995: 229)。動詞のタイプに関しては、状態動詞以外であれば、ほとんどの動詞語根に /-(r)asar-/ は後接することができる (佐々木 2015: 176)。また、ラサル構文は、自動詞・他動詞のいずれが用いられる場合であっても、動作主 (Agent) が文中に現れないという統語的な特徴がある。

以下の小節では、他動詞を語幹として持つラサル構文と自動詞を語幹として持つラサル構文のそれぞれについて、その統語的特徴を具体的に確認する。

市）で過ごした北海道方言話者である

3　なお、本研究では考察の対象外としているが、北海道方言のラサル構文と形式的・意味的に類似する表現を、日本語の複数の方言において見出すことができる。詳しくは加藤（2000）、山田（2007）、白岩（2012）等を参照。

2.1.1 他動詞を用いた場合

/-(r)asar-/ が他動詞に付加された場合、ヲ格を取っていた名詞が主語化してガ格に昇格し、動作主は構文から削除される (山崎 1995: 229)。

(1)　a. 私は御飯をたくさん食べる。
　　b. φ 御飯（が）たくさん食べらさる。

(ibid.: 229)

このように削除された動作主は、文中において現れることはできない。

(2)　a. 夕飯がたくさん食べらさる。
　　b. *私は夕飯がたくさん食べらさる。

(2a) の例文は、いわゆる「自発」の用例であり、夕食をたくさん食べてしまう（＝食が進む）ということについて述べた文であるが、(2b) のように、夕食を食べる動作主が文中に現れた場合は非文となる。

(2b) は主語位置に動作主が現れ非文となったケースであるが、たとえ斜格の形であっても、動作主は文中に現れることはできない。

(3)　a. 大きな丸が描かさってる　(佐々木 2015: 177)
　　b. *誰かによって大きな丸が描かさってる

(3a) は、いわゆる「結果状態」の用法に分類される文であり、大きな丸が地面などに描かれている様子を表しているが、文中に動作主が現れている (3b) の文は、(2b) の場合と同じく非文となる。この結果状態の用法は、動作主によってある対象に為された事態について述べるという点で、意味的に共通語の受動文と類似している。しかしながら、受動文では斜格の形で動作主が文中に現れることが可能であるのに対し、ラサル構文では動作主の文中への出現は容認されない。この点が、当該構文の統語上の大きな特徴となっている。

2.1.2 自動詞を用いた場合

自動詞を語幹として持つラサル構文も、基本的に動作主が文中に現れることが出来ない。

(4)　a. バスもタクシーもなくて、丸山から西野まで歩かさった。　(山崎 1995: 23)
　　b. *バスもタクシーもなくて、私は円山から西野まで歩かさった。

また、動作の起点や経由を表すヲ格は、無助詞で表されることが一般的である。

(5) a. 階段をやっと上まで登った。
b. 階段（?を）やっと上まで登らさった。

(山崎 1995: 229)

2.2 意味的特徴

続いて、ラサル構文の意味的用法について概観したい。前節でも述べたように、当該構文の用法分類には、研究者により若干の異なりがあるものの、おおむね「自発」「可能」「結果状態」の 3 つが設定されてきた。以下、その各々について概観する。

2.2.1 自発

自発は、動作主の意志の及ばないところで動作や変化が実現した、という事態把握の仕方であり、動作主の意志に反して事態が生起した、という場合も含まれる (円山 2006: 55)。

(6) 見たくなくたって見らさる

(6) は、見たくなくても見てしまう、という意味であり、経験者にその意思がないにもかかわらず、対象物が視界に入ってしまう、という事態について述べている。

なお、共通語の助動詞「ラレル」にも自発の用法が存在するが、「ラレル」の自発用法が使用できるのは、認識や思考などの内的な行為を表す動詞に限られている (円山 2006: 55)。そのような特徴により、他動性 (cf. Hopper & Thompson 1980)[4]の高い動詞では、共通語の自発文を作る

---

[4] Hopper and Thompson（1980）は、様々な言語の格交替などのデータに基づき、他動性のプロトタイプに関する以下のモデルを提唱した。

	HIGH	LOW
A. PARTICIPANTS（参与者）	2 or more participants A and O	1 participant
B. KINESIS（動作様態）	Action	non-action
C. ASPECT（アスペクト）	Telic	Atelic
D. PUNCTUALITY（瞬間性）	Punctual	non-punctual
E. VOLITIONALITY（意図性）	Volitional	non-volitional
F. AFFIRMATION（肯定）	Affirmative	Negative
G. MODE（現実性）	Realis	Irrealis

ことが出来ない[5]。

(7)　a. 私には不思議に思われた
　　b. *ドを弾こうとしたのにレが弾かれた　(円山 2006: 56)

一方、ラサル構文の場合、認識や思考を表す動詞はもとより（(8a) の例文)、他動性の高い動詞にも比較的自由につき、自発としての意味を表すことができる。その場合、動作主が持っていた行為に対する制御性は失われ、行為が無意志化される (山崎 1994: 228)。

(8)　a.　思わさった
　　b. レの音が弾かさった

(8b) は、鍵盤楽器などを演奏していて、ほかの音を弾こうと意図していたにもかかわらず、何らかの原因により誤って付近の鍵盤であるレの音を弾いてしまった、という意味になる。

2.2.2 可能

可能は、任意の動作や状態変化について、実現の見込みの有無や、実現できたかどうかを述べるもの (円山 2006: 58) と定義され、共通語では「(ラ) レル」がこの機能を持つ。

ともに可能用法を持つ「(ラ) レル」とラサル構文であるが、両者の適用範囲は一致しない。共通語「(ラ) レル」は、動作主の能力についてあらわす「能力可能」と、動作主の能力については不問に付す「状況可能」の両方をあらわしうる一方、ラサル構文の場合はもっぱら状況可能をあらわす (山崎 1994: 232)。

H. AGENCY（動作主性）	A high in potency	A low in potecy
I. AFFECTEDNESS OF O（対象への影響性）	O totally affected	O not affected
J. INDIVIDUATION OF O（対象の個別性）	O highly individuated	O non-individuated

A は他動詞文の主語を、S は自動詞文の主語をそれぞれ表している。他動詞文の典型性は、表の「高い他動性」で示された意味的な性質をどれだけ多く持つかに基づいて決定される（中村 2004: 176)。他動性に関しては他に角田（1991）を参照。

(9) a. このペンはよく書かさる
b. *ドイツ語で手紙が書かさる

(9a) の例文は、「このペン」はインクの出が良く、紙に字をよく書くことができる、という事について述べており、状況可能を表すが、(9b) のように、「手紙を書くことができる」といった、主体の能力について述べる能力可能をラサル構文で表すことはできない。

さらに、状況可能の中でも、外的条件が原因となり、動作主が意志通りに動作を操作できない [－制御] の状況を表す可能文のみが、容認可能となる (円山 2007:59)。

(10) a. この靴は小さすぎてはけない
b. この靴はデザインがかっこ悪くてはけない （共通語・北海道方言）
(11) a. この靴は小さすぎてハカサラナイ
b. *この靴はデザインがかっこ悪くてハカサラナイ （北海道方言）

(ibid.: 59)

同じ内容について、(10a) (10b) では共通語の可能文、(11a) (11b) ではラサル構文で表現されており、いずれも状況可能に分類される。(10b) (11b) は、靴を「はかない」という行為を動作主自らの意志で決定しており、共通語の可能文の否定である (10b) は問題なく容認されるが、ラサル構文で表した (11b) は、容認不可能となる。

2.2.3 結果状態

「結果状態」としての用法は、山崎 (1994) では「非情物に出現する結果の状態」として、円山 (2007) では「非情物主語の到達用法」として分類されている[6]。しかし、後に述べるように、主語として現れる名詞は非情物に限られないため、本稿では「結果状態」という用語を用いる。この用法は、ある対象に生じた出来事や結果を表すもので、基本的に、過去を表す「タ」形や、「結果の継続」(寺村 1984) を表す「テイル（テル）」形で表現される[7]。

(12) 砂場に丸が描かさってる

---

6 佐々木は当該の用法を、その統語的特徴に着目し、逆使役構文（anticausative construction）として分析している。詳しくは佐々木（2007, 2015）、Sasaki and Yamazaki (2006) を参照。

7 アスペクト形式が持つ意味がこの用法には決定的に関わっている。詳しくは関根（2018）を参照。

(12) は、砂場に丸の絵が描かれている状態について述べた文である。この例文のように、結果状態の用法では、典型的には非情物を主語にとる。しかし、「抱かさる」のように、有情物が主語に現れるものがある。

(13)　a.　親が子供を抱く
　　b. 子供が親に抱かさる

(山崎 1994: 234)

(13b) の例文は、子供が親に抱かれた状態にあることを述べたものであるが、これは、対応する他動詞文である(13a) の旧主語が二格に降格し、旧目的語が主語に昇格しているという点で、受身文と同様の振る舞いを示す。そのため、山崎 (1994) は「抱かさる」一語のみを他の用法から独立させて「受身」の用法として分類している。

しかしながら、有情物を主語にとる結果状態の例は「抱かさる」以外にも一定程度観察されることが佐々木 (2015) により報告されている。

(14) 来てる方を機械的に選ぶことにしてるんだけど、タッグの時偶然骨々親子が相手チームに選ばさって、これまた偶然骨々ツープラトンまで拝めちゃって得した気分になってたのさ。…

(p-cruz.pocket3.net/carol-hp/nikki_03_01b.html/ 佐々木 2015: 196)

また、佐々木が指摘するように、「抱かさる」が取る、他動詞主語に対応するニ格名詞句は、動作主としてではなく、場所として解釈することが出来る (佐々木 2015: 190)。それゆえ、「抱かさる」のみを受身として独立させずとも、結果状態の例として位置づけることができよう。

2.3 先行研究の検討

ここまで、ラサル構文の主要な先行研究に基づき、当該構文の用法を概観してきた。ここでは、従来型の分類に粗さがみられるという点について検討したい。具体的には、異質な用例が同一の用法にまとめられていたり、用法をまたぐような中間的な事例が存在する。例えば、山崎 (1994) では、以下に示すような例を同一の可能用法として見なす。

(15)　a. このペンはガラスにも書かさる
　　b. 鉛筆がきれいに削らさる

(山崎 1995: 232)

たしかに、これらの性質は、双方の文を共通語に言い換えた際にいずれも「～できる」という形になる。ゆえに可能用法としてまとめることはできるが、前者は形式的には助詞である「は」でマークされた名詞について、その属性について述べる形を取っているのに対し[8]、後者はガ格でマークされた「鉛筆」が意図に沿ってきれいに削ることができるという意味を表す。また、以下のような例は、従来の定義では「自発」「可能」のいずれともれる例である。

(16) 暑いから酒が飲まさる

上の例文はおおむね、暑いのでつい酒を飲んでしまう、あるいは飲むことが出来る、といった意味になる。このような、従来分類においては境界的な事例も適切に捉えるためには、それぞれの共通性を捉えるべく包括的な観点から特徴付ける必要がある。

3. 認知文法に基づく分析

本節では、認知文法 (cf. Langacker 1987, 1990, 1991, 2008) の理論的枠組みを援用し、ラサル構文の分析を行う。認知文法の枠組みに基づき当該構文にアプローチすることにより、従来個別に扱われてきた複数の用法に対して、一貫した観点から説明を与えることができる。まず、3.1 節にて認知文法の理論的枠組みを本稿の分析と関連する範囲で導入する。つづく 3.2 節では、認知文法の観点から、ラサル構文の意味的特徴づけを行う。そして 3.3 節では、3.2 節にて提示した特徴づけにもとづき、動詞分類ごとの当該構文の生産性について検討する。

3.1. 理論的背景

以下、具体的な分析に先立ち、分析の道具立てとなる認知文法の理論的枠組みについて取り上げ、その基本的な考え方を概観する。

3.1.1. 記号的文法観

認知文法では、文法は本質的に記号的 (symbolic) であると考える (Langacker 1987)。そして、あらゆるレベルの言語表現は、音韻極 (phonological pole) と意味極 (semantic pole) からなる記号ユニット (symbolic unit) を成しているとされる。このような考え方は、Saussure の言語観を思わせるものであるが、Langacker は、Saussure 的言語観においては言語記号の恣意性がいささか強調されすぎているきらいがある点を指摘し、言語記号の有契性、すなわち言語記号とその意味が何らかの形で動機づけられている側面があることを強調する (Langacker 1987: 12)。そし

---

[8] 本稿では、その形式的特徴から、「～はXがVラサル」型の表現を派生的な構文であると見なし、考察の対象外とする。

て、こうした記号構造の集合体こそが、文法であるとされる。以下に示す図は、意味極 (S) と音韻極 (P) が結びついた記号構造 (Σ) を示したものであり、記号構造同士が結合することによりさらに高次の記号構造となり得ることを示したものである。

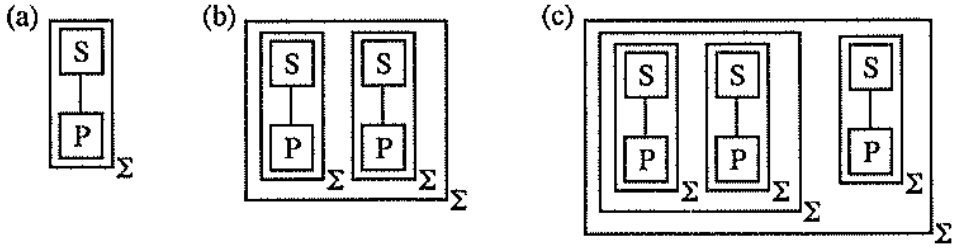


図 1: 記号構造 (Langacker 2008:15)

このような考え方は記号的文法観 (symbolic view of grammar) と呼ばれ、認知文法の理論的枠組みの根幹をなしている。

3.1.2 ベースとプロファイル

ベース (base) とは、言語表現の概念的な背景となるものであり、プロファイル (profile) とは、ベースのうち、認知的な際立ちが高く焦点化される部分、すなわち言語化される部分のことをいう。このことを、具体例に即して考える。以下の図は、左から hub（中軸）、 spoke（スポーク）、rim（外輪）、wheel（ホイール）を図示したものであるが、これらはタイヤの全体を共通の概念的ベースとして持ち、それぞれの語が表す部分をプロファイルする。認知図式においては、プロファイルされた部分は太字で表される。

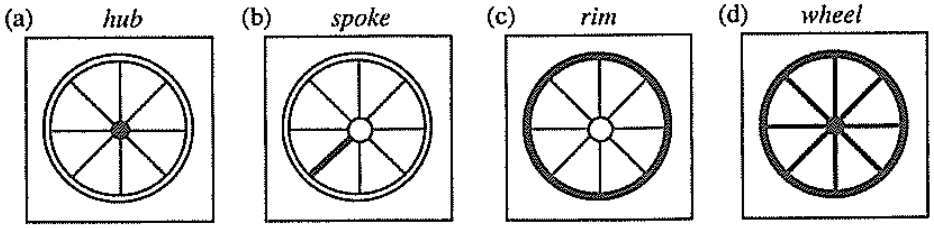


図 2: ベースとプロファイル (Langacker 2008: 67)

このことから、言語の意味は、内容 (content) のみならず、その内容に対する概念化者の解釈 (construal) が反映されていることがわかる。

また、こうした関係は「図／地」(figure/ground) の関係として捉えることが出来るが、これは関係を表す表現にも反映される。認知文法では、ある関係がプロファイルされるとき、最も際立ちが高い参与者をトラジェクター (trajectory: tr) 、二次的な焦点参与者をランドマーク (landmark: lm) という (Langacker 2008: 70)。認知文法における主語の定義は、当該の事態において最も認知的な際立ちを持つ参与者、すなわちトラジェクターである。

(17) a. John murdered Mary.
b. Mary was murdered (by John).

(尾谷・二枝 2011: 49)

上に示した例文は、同一の事態を概念的なベースとして共有する能動文と受動文のペアであるが、(17a) の能動文では、動作主である John にトラジェクターの地位が付与され主語となり、被動者である Mary はランドマークとしての目的語となっている。反対に、(17b) の受動文では、被動者である Mary にトラジェクターの地位が付与され主語となっている。つまり、動作主と被動者のどちらを第一の際立ちを持つトラジェクターとして認知するかが、能動文と受動文の選択に関わっている。このように、認知文法においては、主語や目的語などといった文法関係の基盤に、認知的な際立ちが決定的に関わっていると考える。

3.1.3 言語表現と行為連鎖

ビリヤードボール・モデル (billiard-ball model) とは、Langacker (1990) が提唱した、外界の事態を理想化して捉えた理論モデルであり、特にエネルギーの授受が連鎖的に行われる事態を表している。これは、外界の存在物をビリヤードの球に見立て、それらが衝突することで移動ないしは変化する様を捉えようとするものである。以下の図は、モノ同士の相互作用をモデル化したものである。

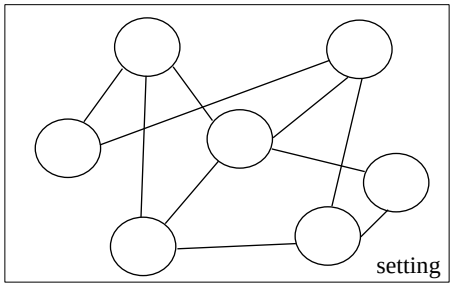


図 3: ビリヤードモデルに基づく相互作用ネットワーク (Langacker 1990: 215)

そして、行為にかかわる事象は、外部世界のモノ同士の相互作用的なネットワークの一部を構成する行為連鎖 (action chain: Langacker 1990) として理解される。以下に示す行為連鎖の図からは、一つの参与者から次の参与者へと、エネルギーが伝達されていることがわかる。人間は、外部世界の事態を何らかの主体的な視点から意味づけし、言語表現としてコード化している (山梨 2009: 50)。行為連鎖は、人間が経験を通してその共通性を捉えてパターン化した、概念原型 (conceptual archetypes) の一種である。

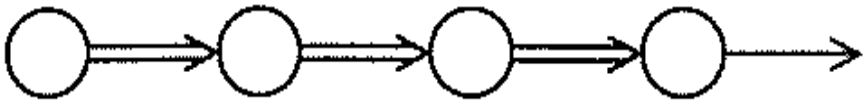


図 4: 行為連鎖 (Langacker 2008: 356)

言語表現の分析においては、事象の構造に関する人間の認知を行為連鎖として示すことにより、エネルギーの伝達や参与者の変化を含む文の特徴を視覚的に捉えることができる。

このことを、具体的な言語表現に照らし合わせて考える。

(18) 彼はコップを割った

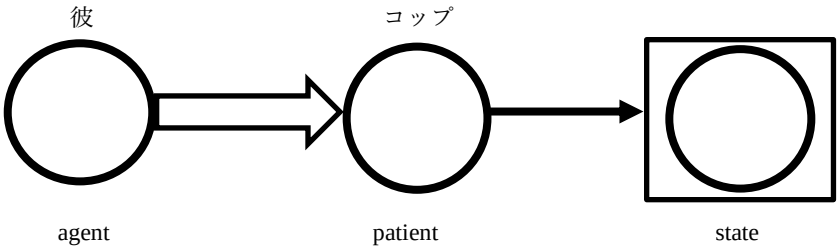


図 5: 「彼はコップを割った」の行為連鎖

上の図は、彼はコップを割った、という文の認知構造を行為連鎖によって表したものである。動作主である「彼」が、被動者である「コップ」にエネルギーを行使（二重矢印で表現）し、その結果、コップが割れた状態へと変化（矢印で表現）したことを表している（結果状態をボッ

クス入りの円で表現)。これは他動詞文のケースで、行為連鎖における一連の事態がプロファイルされているが、叙述のスコープ[9]を被動者と結果状態に狭めることで、同様の事態について「コップが割れた」という自動詞文で表現することができる。

(19) コップが割れた。

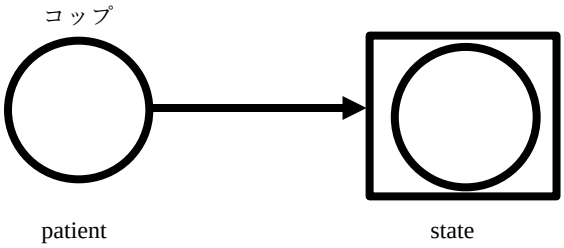


図 6:「コップが割れた」の行為連鎖

上の図は、patient であるコップ（左の円）が割れた状態になった（右のボックス）ことを表し、agent およびその力の行使は問題とされていない。

また、行為連鎖による表示は、態 (Voice) の分析においても有効である。以下に示す例文は再び、能動文と受動文の対応である。

(20) a. John broke the glass.
b. The glass was broken (by John).

(谷口 2005: 39)

(20a) が能動文、(20b) が受動文の事例であるが、これを行為連鎖によって図示すると以下のようになる。

9 認知文法では、叙述のスコープとして、言語表現の意味に直接的に関与する直接スコープ（Immediate Scope: IS）と、言語表現の意味に関与する概念内容の全体を含む最大スコープ（Maximal Scope: MS）の 2 つを設定する（cf. Langacker 2008）。

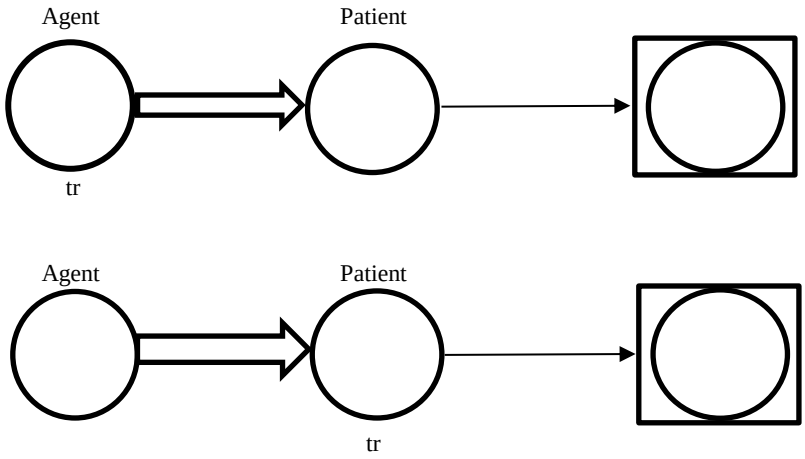


図 7: 能動文（上）と受動文（下）の認知構造 (Langacker 1990: 229; 谷口 2005: 40)

先に挙げた能動・受動で対立する 2 文は、同一の概念内容をベースとして共有しながらも、どの意味役割の参与者をトラジェクターとして選択するか、という点において異なっていることがこの図から理解される。

3.2 認知文法の理論的枠組みに基づく当該構文の分析

認知文法の枠組みで当該構文の分析を試みた研究に、氏家 (2016) がある。そこでは、ラサル構文が表す捉え方は、中間態 (middle voice) であると主張されている。次節では、氏家 (2016) による分析を検討しつつ、当該構文の基本的な特徴づけを行う。

3.2.1 中間態

中間態（中動態）とは、態 (Voice) を表すカテゴリーのひとつで、その具体的な現れ方は言語によって異なる[10]。

Langacker (2008: 385) では、能動・受動の対立の他に、多くの言語において中間態と呼ばれる構文を持つとし、以下に示す英語における例のうち、(b) が中間態の最も基本的な構造であるとして特徴付ける。

---

10 Kemmer（1993: 54–92）は、中動態を表す 10 タイプの状況を提示し、そのうち、身体の手入れ、位置変化を起こさない動作、身体の姿勢の変化、の 3 つの状況が、中間態が表す中心的な状況であるとしている。

(21) a. I opened the door.
b. The door opened easily.
c. The door opened.
d. The door was opened.

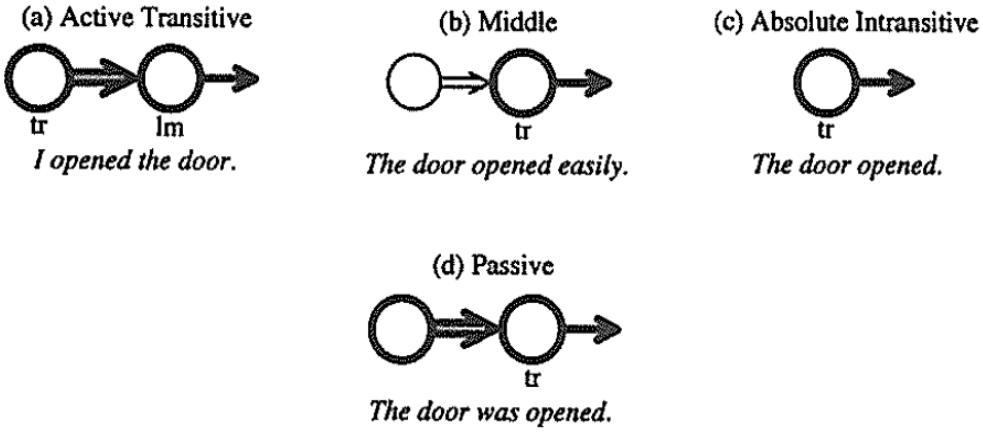


図 8: Langacker (2008: 385)

(a) は能動態の他動詞文で、行為連鎖 (action chain) における因果的な他動的関係の全体がプロファイルされており、動作主 (agent) とそれに後続する参与者である被動者 (patient) に、それぞれトラジェクターとランドマークの地位が付与されている。(b) は先述の通り中間態で、動作主を含む他動的事態を概念的ベースとして持ち、そのうち結果事象のみをプロファイルしている。このとき、行為連鎖のうち、被動者にトラジェクターの地位が付与されている。(c) は絶対自動詞文であり、動作主とその変化のみがプロファイルされている。(d) は受動態であり、他動的事態をプロファイルするが、被動者にトラジェクターの地位が付与されている。もっとも、受動構文は、動作主の脱焦点化 (agent-defocusing: Shibatani 1984) を語用論的動機としてもつ構文であり、多くの言語において動作主を斜格句で符号化することが許容されるものの (Maldonado 2007: 836)、動作主が明示的に表されることは実際には少ない。

3.2.2 他動詞から派生されたラサル構文

氏家 (2016) は、以下に示す例文を参照し、ラサル構文は中間態、すなわち動作主とその行為を含んだ因果的事態をベースとして、その結果状態をプロファイルするものであるとして、スキーマ的な意味構造を特徴づけている。

(22) やっと釘が抜かさった

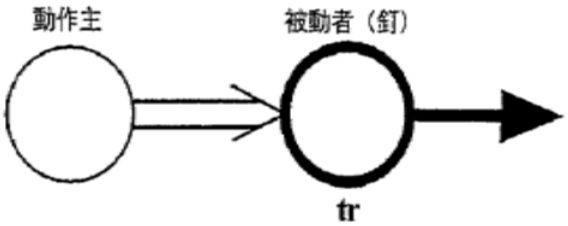


図 9: ラサル構文が表す事態の行為連鎖 (氏家 2016: 273)

(22) の例文は、共通語では「釘を抜こうとして、やっと釘が抜けた」と言い換えられる (ibid.: 272)。行為の対象がトラジェクター、すなわち主語となり、様々な先行研究 (cf. 山崎 1995, 佐々木 2007, 2015, 円山 2016) が指摘するように、動作主は文中において表現されることはない。

以上の氏家 (2016) による当該構文の特徴づけを、共通語の能動他動詞文との関連で具体的に検討したい。

(23) 私はボタンを押した

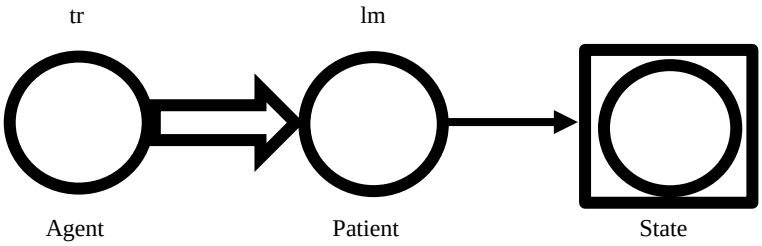


図 10: 能動他動詞文「私はボタンを押した」

(24) は能動態の他動詞文で、動作主である「私」が被動者である「ボタン」を「押した」、という事態について述べたものであり、行為連鎖における一連の因果的事態がプロファイルされている。これは、先述した Langacker による能動他動詞文の特徴づけと一致する[11]。

[11] このような、Agent が Mover/Patient に働きかけ、その位置、状態を変化させる、という

他方、次に示す、これと対応するラサル構文は、以下ように捉えられる。

(25) ボタンが押ささった

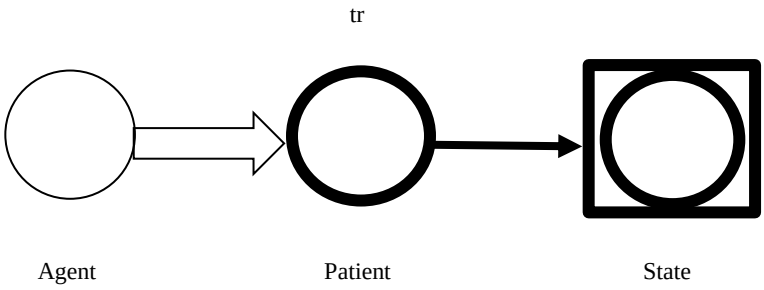


図 11: ラサル構文「ボタンが押ささった」

(25) は、ボタンが押した状態になった、ということを表しており、動作主と被動者を含む因果的事態をベースとして持ち、そのうち末端の参与者である被動者とその結果状態をプロファイルしている。これは、氏家 (2016) が指摘するように、Langacker (2008: 385) による態分類のうちの、中間態の概念構造と一致する。したがって、少なくとも他動詞を語幹として持つ当該構文は、語幹となる他動詞が喚起する他動的事態の概念内容をベースとして持ち、そのうちの末端参与者とその結果状態をプロファイルする構文であると特徴づけることができる。

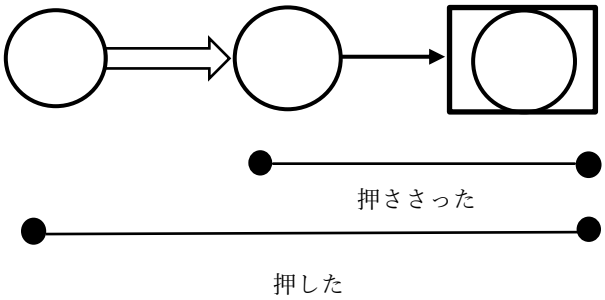


図 12: 「押した」と「押ささった」の適用範囲

上述の氏家 (2016) の分析は、他動詞を用いたラサル構文において適用されうるものである。しかしながら、ラサル構文を派生させる接辞 /–(r)asar-/ は、実際には上述のような他動詞だけ

事態は他動的事態の典型（Prototypical Transitive Relation）であるとされる（谷口 2005: 34)。

ではなく、自動詞にも後接されることがある。

(26) バスもタクシーもなくて、丸山から西野まで歩かさった。

(26) の例文は、バスやタクシーがないという状況のために、歩かざるを得なかった、という事態について述べたものである。以下の小節では、自動詞から派生されたラサル構文の特徴づけを試みる。

3.2.3 自動詞からの派生

ここで、自動詞派生のラサル構文の検討に先立ち、自動詞が表す事態について考えたい。Perlmutter (1978) による非対格性仮説 (Unaccusative Hypothesis) に基づき、自動詞はその統語的性質により非対格動詞 (Unaccusative verb)と非能格動詞 (Unergative verb)の 2 つに区別することができる。それぞれ、以下のように特徴づけられる。

(27)　a. 非対格動詞：他動詞の内項に相当する要素を主語とする自動詞
　　b. 非能格動詞：他動詞の外項に相当する要素を主語とする自動詞

内項 (internal argument) の意味役割は典型的には Patient または Mover であり、外項 (external argument) の意味役割は典型的には Agent である。以下は、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の三者の項構造を示したものである。x と y は動詞の項を表し、<> 内が内項を表す。

(28)　a.　　他動詞：(x <y>)
　　b. 非能格自動詞：(x < >)
　　c. 非対格自動詞：(　<y>)

(影山 1996: 21)

また、こうした区分は統語的性質のみならず、意味的な基盤をも有するもので、動作の意図性の有無によって、それぞれ非能格動詞、非対格動詞に分けられるとされる。英語の動詞を例に、それぞれの具体例を挙げる。

(29) 非能格動詞
　　a. 意図的ないし意志的な行為を表す動詞 (work, play, speak など)
　　b. 生理的現象を表す動詞 (cough, sneeze, cry など)

(30) 非対格動詞

a. 大きさ、形状、重さ、色、におい、精神状態などを表す形容詞およびそれに相当する状態動詞

b. Theme および Patient を主語にとる動詞（burn, fall, drop, sink など）

c. 存在や出現を表す動詞 (exist, happen など)

d. 五感に作用する非意図的現象を表す動詞 (shine, sparkle, glitter など)

e. アスペクト動詞 (begin, start など)

f. 継続動詞 (last, remain など)

(Perlmutter 1978; 高見・久野 2001)

認知文法の観点では、自動詞によって記号化される状況は、単一の参与者から成立する事態であり、Langacker (1991: 244) は、単一の参与者からなるプロセス的事態を、thematic relationship と呼ぶ[12]。以下に示す図は、谷口 (2005) による thematic relation[13] の認知図式であり、右側の点線の図は、移動の到達点が自動詞によっては前置詞句を伴わない限り明らかではないことを表している。

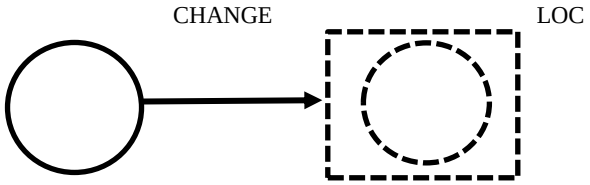


図 13: Thematic relation (谷口 2005: 120)

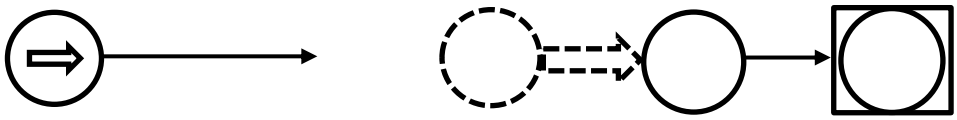
さらに、この thematic relation は、参与者自身がエネルギーを発して変化を起こしている場合と、外部に存在する参与者からエネルギーを受けて変化する場合の 2 つに下位区分される。前

---

12 認知文法では、動作主をトラジェクターとして選択する方略を agent orientation（動作主志向性）、主題（被動者、移動格など）をトラジェクターとして選択する方略を theme orientation（主題志向性）という。thematic relation は後者に相当し、日本語はこれを事態解釈の基本的単位とする傾向がある（cf. 谷口 2005, 村尾 2018）。

13 谷口（2005）では thematic relationship を thematic relation という用語で言及する。これは、transitive relation（他動関係）との用語上の平行性を保つためであるが（ibid.: 154）、本節の分析は谷口（2005）に負う部分が大きいので、後者の用語を採用している。

者は、Self-induced thematic relation (以下 S-thematic relation) 、後者は Externally-driven thematic relation (以下 E-thematic relation) と呼ばれる。以下は、その各々を認知図式によって表したものである。



(a) S-thematic relation　　(b) E-thematic relation

図 14: S-thematic relation と E-thematic relation (Langacker 1991: 245; 谷口 2005: 123)

この S-thematic relation と E-thematic relation はそれぞれ、非能格動詞と非対格動詞に基本的に対応する[14]。

以下では、これらの自動詞がラサル構文として実現した場合、どのような捉え方がなされるかを、以下の例をもとに検討する。

(31)　a. 外がうるさかったから、起きらさった。
　　b. 後輩の笑顔を見たら、なごまさった。

(31a) は S-thematic relation を概念構造として持つ動詞「起きる」を語幹とするもので、家の外でバイクなどの大きな音が鳴っているなどといった原因により、起きてしまった、という事について述べており、これも文中に動作主が現れることは無い。(31b) は E-thematic relation を概念構造として持つ「なごむ」を語幹とするもので、後輩の笑顔を見たことによって、なごんだ気持ちになった、という事態について述べている。これも動作主は表現されることはない。

(32)　a. *外がうるさかったから、私は起きらさった。
　　b. *後輩の笑顔を見たら、私はなごまさった。

(31) の二つの文が表現する事態は、以下に示すような認知図式で表される。

---

14 谷口（2005）では、非能格動詞と非対格動詞は、それぞれ、S-thematic relation, E-thematic relation をプロトタイプとするネットワークを形成していると主張されている。

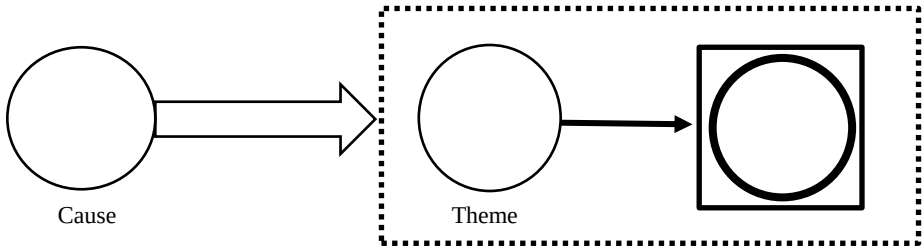


図 15: 自動詞を用いたラサル構文の認知構造

上の図において、点線の囲いは Cause 項によって引き起こされた事態を表している。ここでは、S-thematic relation に関して、語幹動詞が語彙的に指定しない Cause 項の存在が含意される点が注目に値する。本来、S-thematic relation は、エネルギー源 (energy source) を自身の中に持つ。しかし、S-thematic relation の構造を持つ動詞がラサル構文において用いられる場合、上記の図が示しているように、参与者自身のエネルギー源ではなく、Cause 項によって事態全体がもたらされる。そして、そのうちの末端である変化状態をプロファイルする。したがって、自動詞を用いたラサル構文は、外的な要因が対象に作用することにより生じた事態における結果状態について述べた構文であるといえる。

以上までの検討により、他動詞を語幹として持つラサル構文は、その語幹の動詞が喚起する他動的事態のうち、末端参与者を含む結果事象をプロファイルする、いわゆる中間態の捉え方をする構文であり、自動詞を語幹として持つラサル構文は、外的な要因が対象に作用することにより生じた事態における、変化状態についてプロファイルする構文であると特徴づけられる。

3.3 動詞との関わり

前節までの考察により、認知文法的な観点からラサル構文の基本的な性質について特徴づけた。本節では、これを踏まえつつ、当該構文に用いられ得る動詞とその生産性について、検討したい。

日本語の動詞を分類したものとしては、アスペクトの観点から分類されたもの (金田一 1950, 工藤 1995) などが知られているが、ここでは、早津 (2016) による分類を採用する。早津による動詞分類は、対象への働きかけや（広い意味での）変化に着目する点で、認知文法の枠組みと親和性が高い。当該の分類は、現代日本語の使役構文の分析を目的に行われたもので、「何に変化を生じさせることを目的としているか」という観点からの他動詞・自動詞の分類と、「無意志動詞」に相当する自動詞の分類とがある。動詞の分類と主な動詞例は以下のものである[15]。

[15] 表記等、原典のものを一部改めている。箇条書きによる小分類は、同タイプのものをまと

(33) 意志動詞

a. 「対象変化志向の他動詞」
・切る、削る、洗う、仕立て直しする、修理する、閉じる、開封する、片づける
・つぐ、塗る、つける、埋める、植える、敷く、入れる
・はがす、（服を）出す
・運ぶ、送る、おろす、持っていく、買ってくる、
・（部屋に）通す、集める、帰す
・弱める、改める、ゆるめる
・おこなう、はじめる
・作る、こしらえる、築く、仕立てる、建設する、建てる、掘る
・押す、引く、たたく、もむ、なでる

b. 「やり取り志向の他動詞」

b1. 授与・発信型
・支払う、払う、（金を）出す、納める、届ける、貢ぐ、売る
・伝える、話す、連絡する、言う、しゃべる、（噂を）流す

b2. 取得・受信型
・うけとる、もらう、引き取る、引き受ける、借りる、稼ぐ、買う
・聞く、聞き取る

c. 「主体変化志向の他動詞」
・見る、聞く、味わう
・考える、検討する、思いとどまる、決意する
・理解する、承認／承知／承諾する、納得する、信じ込む
・調べる、調査する、尋ねる、伺う、探す
・読む、習う、習得する、学ぶ、覚える
・経験する、体験する
・食べる、飲む、飲み込む、吸う
・かがめる、つぶる

めたものである。

・着る、ぬぐ、はく、かぶる
・背負う、担ぐ、持つ

d. 「主体変化志向の自動詞」
・行く、来る、帰る、去る、外出する、歩く、走る、泳ぐ
・座る、立つ、仰向く、うつむく、横たわる、乗る、降りる
・結婚する、一人立ちする、独立する、勤める、通う、入学する、進学する
・入会する、卒業する、退学する、接近する
・働く、遊ぶ、住む

(早津 2016: 92-94)

(34) 無意志動詞

a. 「心理変化動詞」
・イライラする、苛立つ、落ち着く、驚く、緊張する、狂う、昂揚する、しらける、戦慄する、楽しむ、動揺する、ときめく、なごむ、奮い立つ、満足する、滅入る
・わくわくする、どきどきする、いらいらする、ぴりぴりする、くさくさする

b. 「生理変化動詞」
・委縮する、痛む、飢える、潤む、衰える、くらむ、こわばる、疲れる、震える、麻痺する、目覚める、酔う

c. 「物変化動詞」
・きしむ、腐る、ひっこむ、ひろがる、長引く、しずまる、調和する、安定する、凍る、沈む、しぼむ、縮む、とがる、波立つ、ねばつく、はずむ、ひっこむ、沸騰する、腐敗する、ほころぶ、もつれる、やきただれる、沸く

d. 「事変化動詞」
・変わる、一変する、（経済／知恵が）発達する、混乱する、回復する、（判断が）鈍る、（態度が）硬化する、つのる、しずまる、広がる、よみがえる、調和する、安定する、曲折する、成就する、減退する、向上する
・（記憶が）よみがえる、浮かび上がる、沸き立つ

(ibid.: 135-136)

それぞれの動詞分類について簡単に概観する。(33a) の「対象変化志向の他動詞」には、事物に対して広い意味での変化を生じさせることを志向して働きかけることを表す他動詞が含まれる (ibid.: 92)。(33b) の「やり取り志向の他動詞」は、人と人との間の物のやり取りを表す動詞（広義の授受動詞）と、情報のやり取りを表す動詞（言語活動動詞）の二つから成る分類で、物や情報を主体から相手に向かって与える働きを表す「授与・発信型」と、主体が相手から情報を受け取る動きを表す「取得・受信型」の二つの下位分類を持つ (ibid.: 93)。(33c) の「主体変化志向の他動詞」は、動作によって主体が何かを感じたり認識したり、あるいは知識や技能が身についたりという、主体の側の変化が生じる動作を表す動詞である (ibid.: 93-94)。(33d) の「主体変化志向の自動詞」は、動作主自身の位置や姿勢、社会的な立場や状況等に新しい状態をもたらす意思動作を表す (ibid.: 94)。

つづいて、無意志動詞である (34a) の「心理変化動詞」は、人の心理状態の変化を表す動詞で、ここには「わくわくする」などのようなオノマトペ＋する型の動詞も含まれる(ibid.: 135)。(34b) の「生理変化動詞」は、人の生理状態の変化を表す動詞で、「（目が）うるむ」や「（顔が）こわばる」などのような、心理面の変化や状態の現れとしての生理面の変化や状態を表す動詞も含まれる (ibid.: 136)。(34c) の「物変化動詞」は、物の物理的な変化について表す動詞で、(34d) の「事変化動詞」は事の変化や出現を表す (ibid.: 136)。

以下本稿では、上記の分類の動詞のうち、どのタイプのものがラサル構文において生産的に用いられるのか、という点について、各々の型を設定し、検討を行う。

3.3.1 「NP が Vt [対象変化志向] ＋ラサル」型

このタイプのラサル構文は、動作主が対象に働きかけ、当該の対象に何らかの変化を生じさせる、という他動的事態をベースとして持ち、そのうち行為過程とその結果についてプロファイルする。漢語＋する型の動詞や、やや口語的ではないものを除き、ほとんどの動詞について、ラサル構文として実現することができる。その理由は、これらの動詞が喚起する概念構造が、典型的な他動的事態をベースとしており、したがって当該構文のスキーマ的特徴づけとなじむからである。

(35) 糸が切らさった。

(35) の例文は、何らかの要因により糸が切れた状態になった、という意味をあらわす。

3.3.2 「NP が Vt [やり取り志向]＋ラサル」型

やり取り志向の他動詞とは、モノや情報を主体から相手に向かって与える動きを表す動詞と、主体が相手からモノや情報を受け取る動きを表す動詞を包括する呼称である。結論から先に述

べると、当該の動詞は、一部の動詞を除き、ラサル構文として実現された場合の容認度は著しく低い (cf. 佐々木 2015)。

(36) a. ??商品が売らさった
b. ??手紙が受け取らさった。

そこで、やり取り志向の他動詞が表す意味構造について考える。いわゆる（広義の）授受動詞は、以下の図に示すような意味構造を持つ。

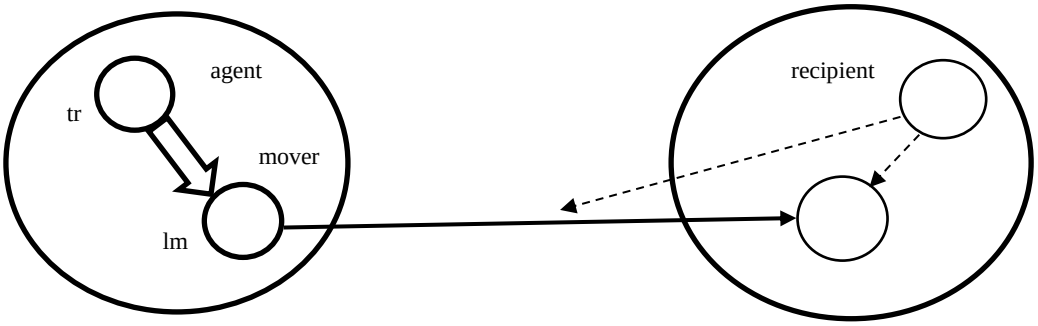


図 16: 授与型の動詞

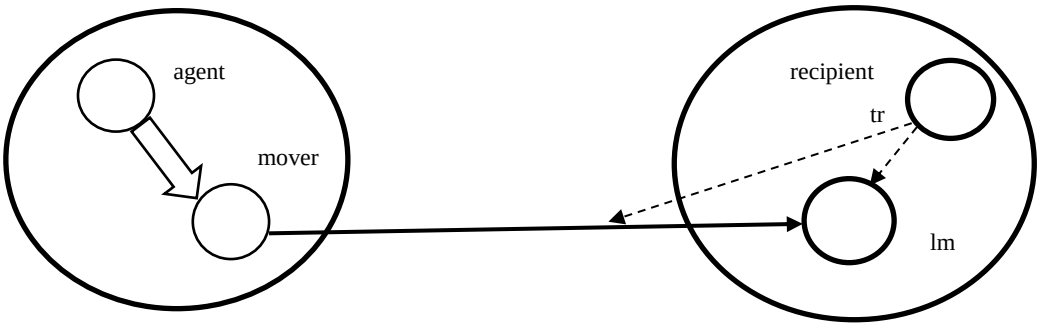


図 17: 取得型の動詞

これは、Langacker (1990: 227) における give と receive の認知構造を日本語の授受動詞の分析に転用したものであるが、この種の動詞の意味特徴は、動作主 (Agent) と移動物 (Mover) による他動的事態に加え、受容者 (Recipient) となる参与者を含む事態を概念内容として含む、とい

うことである。授与型の動詞では、Agent の所有物である Mover が所有者の領域（楕円）へと移動させるという事態を表わし､動作を行使する Agent にトラジェクターの位置が付与される。反対に、取得型の動詞では、同様の事態を基盤として、受け取り手である Recipient にトラジェクターの地位が付与される。

先に述べたように、この種の動詞は、ラサル構文において生起しにくい。他動詞を用いた当該構文のスキーマ的表示は以下の通りであった。

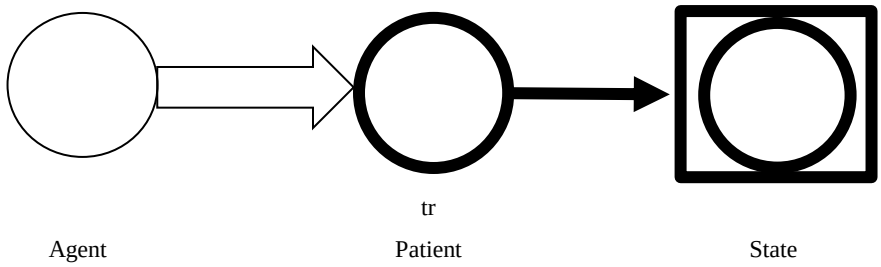


図 18: 他動詞語幹のラサル構文のスキーマ的表示

すなわち、Agent と Patient との 2 つの参与者との間の因果的事態をベースとして、その結果事象をプロファイルするものである。これを踏まえると、Recipient を含む 3 者による事態を記号化する「やり取り志向の他動詞」が表す意味構造は、項の数の点でラサル構文のスキーマから逸脱する。そのため、容認度も下がるものと考えられる。

なお､「やり取り志向の動詞」の中でも、取得型の動詞である「買う」を語幹とする「買わさる」が比較的容認度が高いのに対して、授与型の動詞である「売る」を語幹とする「売らさる」は著しく容認度が下がる。

(37)　a.　モノが沢山買わさる
　　b. ??モノが沢山売らさる

全般的にラサル構文としての容認度が低い「やり取り志向の動詞」のうち、なぜ「買う」を語幹とする「買わさる」の容認度が高いのか、という点については、複合的な要因が関係するものと思われるが､「買わさる」の場合、動作主外的な要因により「商品を買う」という行為が駆り立てられ買ってしまう、といった文脈において用いられる。動作主外的な要因とは､「買う」対

象としての商品である[16]。

(38) a. ショッピングモールには色んな品物があるから、たくさんモノが買わさる
b. 好物が売ってたから、つい買わさった。

この場合、受容者が商品を「手に入れる」という、買い手と商品の二者の関係がとりわけ前景化されるため、容認度が上がるものと考えられる。

3.3.3 「NP が Vt [主体変化志向]＋ラサル」型

この型は、動作によって、主体が何かを感じたり認識したり、あるいは知識や技能を身につけたりという主体側の変化が生じる動詞を語幹として持ち、口語的ではない動詞を除けば、ラサル構文としての生産性は高い。当該の動詞が表す事態は、対象ではなく主体が（広い意味での）変化を被るという点で、他動性は低い。

(39) テレビが見らさる

(39) の例文は、テレビ番組が目に入る、といった意味を表す。上記例文の語幹動詞である「見る」は、いわゆる知覚動詞で、以下の図に示す認知的な構造を持つ。経験者から対象にエネルギーは伝達されず、知覚される対象は位置・状態の変化は起こさない。

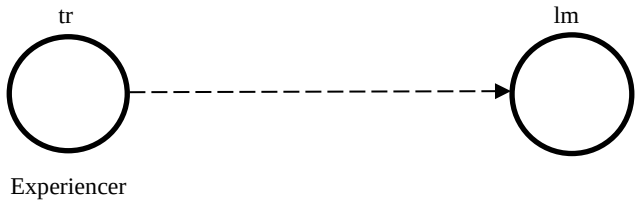


図 19: 知覚動詞の概念構造

知覚動詞がラサル構文に用いられる場合は、ベースとなる事態のうち、心的接触 (mental contact) 、すなわちある対象へと向かう意識と、それが向かう参与者をプロファイルする。なお、

16 動作主外的な要因が行為（購入）の対象物と対応する点に着目すると、「売らさる」の容認度が下がるのは、対象によって売るという行為が駆り立てられるという状況が、一般的な文脈において不自然であることと関係があると考えられるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

知覚対象が目に入る、という状況は、知覚対象が経験者に対し何らかの作用を及ぼすことにより生じる作用である。

基本的にこれら主体変化志向の他動詞は、エネルギーを行使して対象に変化を及ぼすことはないが、典型的な他動的事態と同様、一方の参与者から他方の参与者への非対称的な関係を持ち、これは典型的他動事態の拡張であると見なすことができる。

3.3.4 「Vi [主体変化志向] +ラサル」型

人の意志的動作を表す自動詞で、S-thematic relation をベースとして持ち、当該構文として実現された場合はその行為過程のみをプロファイルする。

(40) 走らさった

(40) は、意味的には「走らざるを得なかった」というものであるが、何らかの状況が動作主に作用して、走らざるを得なかったという状況を表している。当該の状況は、外的な要因が作用することによって生じる変化状態について述べる、という自動詞派生型のラサル構文のスキーマ的特徴づけに一致する。ゆえにこれらの動詞も、やや口語的ではない「漢語＋スル」型の動詞などを除き、比較的生産的に用いられることができる。

3.3.5 「Vi [心理変化動詞]＋ラサル」型

人の心理状態の変化を表す自動詞を語幹として持つもので、E-thematic relation をベースとして持つ。ラサル構文においては、そのうち外的な要因によって引き起こされた経験者の心理状態の変化の部分をプロファイルする。

(41) ときめかさった

(41) の例文は、心がときめいた状態になった、という意味である。当該の状況も、外的な要因が作用することによって生じる変化状態について述べる、という自動詞派生型のラサル構文のスキーマ的特徴づけに一致する。これらの動詞も、やや口語的ではない「漢語＋スル」型の動詞などを除き、比較的生産的に用いられることができる。

3.3.6 「Vi [生理変化]＋ラサル」型

生理変化動詞は、人の生理状態の変化を表す動詞であるが、これらの動詞を用いたラサル構文は、外的な要因によって引き起こされた人の生理面の変化や状態についてプロファイルする。

(42) 酔わさった

(42) の例文は、酒類を摂取したことが引き金となり、「酔った状態になった」ということについて述べたものである。生理変化動詞に属する動詞も、自動詞派生のラサル構文の特徴づけになじむものであり、比較的生産的に用いられる。

3.3.7 「Vi [物変化／事変化]＋ラサル」型

この型は、モノの物理的変化やコトの変化を表す動詞を用いたもので、対象の変化とその結果状態をプロファイルする。

(43) バナナが腐らさった

(43) はバナナが腐った状態になった、という意味である。これは、対象を取り巻く外的な要因によって、物や事に起こった変化を外部から観察するもので、その点で、動作主に起こる何らかの変化を表す他の自動詞の型とは性質が異なるものであるといえる。この種の動詞が用いられる場合も、当該構文のスキーマ的特徴づけになじむものであり、比較的生産的に用いることが出来る。

3.4 まとめ

本節では、ラサル構文に用いられうる動詞の種類について、早津 (2016) による分類を用い考察し、その生産性についても検討した。他動詞型のラサル構文では、「対象変化志向」の動詞および「主体変化志向」の動詞を語幹とするラサル構文の生産性は高いものの、授受動詞などの「やり取り志向」の動詞を語幹とするラサル構文の容認度は著しく下がるという特徴が認められた。それは、「対象変化志向」の動詞および「主体変化志向」の動詞が、二者間による因果的事態をベースとしているのに対し、やり取り志向の動詞は動作主、移動物、受容者の三者を含む事態をベースとしており、当該構文のスキーマからは幾分逸脱していることが、容認度を下げている一つの要因であると考えられた。

自動詞型のラサル構文は、「主体変化志向」の動詞、そして無意志動詞である「心理変化」動詞、「生理変化」動詞、「物／事変化」動詞のいずれを語幹とするラサル構文も生産性が高い。なお、「物／事変化」動詞型の場合は、他の三つの型が動作主における何らかの変化を表すのに対し、物や事に生じる変化について述べるものであった。

4. おわりに

本稿では、北海道方言におけるラサル構文について、認知文法の理論的枠組みを用い分析を行った。まず、他動詞派生型のラサル構文を「因果的事態における結果事象をプロファイルする」ものとして特徴づけた氏家 (2016) を検討したうえで、自動詞派生型のラサル構文を、外的な要因が参与者に作用することにより生じた変化についてプロファイルする構文であると特徴づけた。さらに、上述の特徴づけを踏まえ、早津 (2016) による動詞の分類を導入し、当該構文において用いられ得る動詞および用い難い動詞について、その生産性の検討を行った。その結果、語幹動詞の概念構造がスキーマ的特徴づけに逸脱しない範囲であれば、様々なタイプの動詞が生産的にラサル構文として実現しうることが明らかとなった。

ラサル構文は、形態素 /-(r)asar-/ が動詞語幹に後接することにより表されるものであるが、この形態素は、いわゆる脱使役化 (影山 1996: 184) の接辞である /-ar-/ との関連を伺わせる。この接辞は、他動詞を基本として、そこから自動詞を派生させる接辞であり、共通語において多くの自他対応にこれを見出すことができる。

(44) 他動詞＋-ar- →　自動詞
植える／植わる、集める／集まる、詰める／詰まる、まぜる／まざる、いためる／いたまる、掛ける／掛かる、ふさぐ／ふさがる、つなぐ／つながる、儲ける／儲かる、決める／決まる、助ける／助かる、（値段を）まける／まかる、薄める／薄まる
(影山 1996: 183)

ラサル構文にかぎらず、類似する諸方言の形式において、その形態素に /-ar-/ を含み、かつ他動詞を用いて自動詞を派生させる用法をもつことは、通方言的に見て興味深い点であり、このような観点から、様々な方言とのかかわりで対照研究が行われることが望まれる。

参考文献

石垣福雄. 1982. 「北海道沿岸部の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『北海道・東北地方の方言』東京：国書刊行会.

石垣福雄. 1983. 『北海道方言辞典』札幌：北海道新聞社.

氏家啓吾. 2016. 「北海道方言-rasar- 構文の表す捉え方」『東京大学言語学論集』37: 261–279.

尾谷昌則・二枝美津子. 2011. 『構文ネットワークと文法：認知文法論のアプローチ』東京：研究社.

影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版.

加藤昌彦. 2000.「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的および形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25: 1–58.

金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48–63.

工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現』東京：ひつじ書房.

佐々木冠. 2007. 「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語的研究』259–270. 東京：くろしお出版.

佐々木冠. 2015. 「北海道方言における形態的逆使役の類型的位置づけ」山梨正明（編）『認知類型論』163–211. 東京：くろしお出版.

白岩広行. 2012. 「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24: 35–53.

関根雅晴. 2018. 「北海道方言の“V-(r)asar 構文”の意味と形式」京都大学人間・環境学研究科　修士論文.

高見健一・久野暲. 2002. 『日英語の自動詞構文』東京：研究社.

谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京：ひつじ書房.

角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.

寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.

日本語記述文法研究会. 2007. 『現代日本語文法 3』東京：くろしお出版.

林由華. 2017. 「南琉球宮古語池間西原方言のいわゆる受身可能の接辞と非他動詞化について」日本方言学会第 104 回研究発表会予稿集. 61–68.

早津恵美子. 2016. 『現代日本語の使役文』東京：ひつじ書房.

深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』東京：研究社.

円山拓子. 2007. 「自発と可能の対照研究—日本語られる，北海道方言ラサル，韓国語 cita」『日本語文法』7: 52–68.

円山拓子. 2016. 『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京：ひつじ書房.

村尾治彦. 2018. 「日英語の自他動詞の志向性と 2 つの Natural Path」中村芳久教授退官記念論文集刊行会（編）『ことばのパースペクティブ』98–110. 東京：開拓社.

山崎哲永. 1994. 「北海道方言における自発の助動詞 -rasaru の用法とその意味分析」北海道方言研究会（編）『ことばの世界』227-237. 札幌：北海道方言研究会.

山田敏弘. 2007.「日本語における自他の有対性と他動性—岐阜方言の自動詞「おぼわる」「鍛わる」「のさる」「どかる」を通して—」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語的研究』271–282. 東京：くろしお出版.

山梨正明. 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』東京：大修館書店.

Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Comrie, Bernard and Maria Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity,* 87–120. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Hopper, Paul and Sandra D. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251–299.

Kemmer, Suzanne. 1993. *The Middle Voice*. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Maldonado, Ricardo. 2007. Grammatical voice in cognitive grammar. In Geerarts, Dark and Hubert Cuyckens (eds.), *Oxford Handbook of Cognitive Grammar,* 829–869. Oxford: Oxford University Press.

Perlmutter, David. 1978. Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *BLS* 4: 157–189.

Sasaki, Kan and Akie Yamazaki. 2006. Two types of ditransitive constructions in the Hokkaido dialect of Japanese. In Abraham, Werner and Larisa Leisio (eds.), *Passivization and Typology: Form and function,* 352–372. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

A Study of the "V-*(r)asar*-" Construction in the Hokkaido Dialect of Japanese: From the Perspective of Cognitive Grammar

Masaharu Sekine

This paper examines the grammatical phenomenon called "-*rasar* construction" in the Hokkaido dialect of Japanese from the perspective of Cognitive Grammar (cf. Langacker 1987, 1991, 2008). This construction includes the verb-suffix "-*rasar*" absent from standard Japanese, and has been considered to express three meanings: spontaneity, potentiality, and resultant state. From the cognitive point of view, Ujiie (2016) characterizes this construction as a kind of middle voice construction, which evokes causation as a conceptual base, and profiles the caused event. Ujiie's characterization is valid for instances derived from transitive verbs, but offers no explanation of instances derived from intransitive verbs. This study distinguishes "–*rasar*" constructions derived from intransitive verb from those derived from transitive verb and shows that the former profiles the changing event caused by an external factor acting on the agent. In addition, it shows that a wide range of verbs can be used in this construction so long as they are compatible with its schematic characterization.